

工化時報

題字は 松本太郎先生筆
発行所 東京都千代田区神田駿河台1-8
日本大学理工学部工業化学科内 工化会

50周年記念号
編集委員 齊茂志 子二代誠
南戸孝 高元久 岩小川
報徳行 永島一男 堀川昭雄 児玉裕子 田代誠
伊藤久保樹 反田進一 吉之小松



「二十世紀人としての」 学生諸君への期待

住友ベークライト(株) 取締役社長 野村昌夫

われわれの青春時代は、戦中戦後の時期にあつて、いろいろと苦勞はあつたものの、今から思えばそれなりに充実感がありました。更に社会人となつて、三十余年、これまでいくつもの経験をしてきました。戦後の復興期、更に高度成長期、一転して第一次、第二次オイルショック、そしてこれからの歴史の立ち直り、更に進んで、経済大国日本への躍進、反転して貿易摩擦などに変化多き時代の流れだつたと思ひます。

と多少近視眼的な見方になるかも知れませんが、昨今の急激な高円デフレ下におかれた我が国、産業界は、かつて例を見ない難しい情勢の下にあり、第三の産業革命とも言える変革期を迎えております。つまりわれわれ企業人の立場でいえば、今や持たなしの対応を迫られていくという事です。

今回の研究室訪問は、有機合成化学研究室に板橋先生をお尋ね致しました。先生のお部屋は二階一階入って右側、奥から二番目の二二二号室と地階の二〇六号室にあります。



先生が化学に興味を持たれたのは、中学時代にたまたま試験の成績が良かったことがきっかけとなり、現在の芝浦工業大学に

これは予想外の結果を見逃さず、その理由を学生自身が解決して欲しいためだそうである。

人間になってほしいということですが、さて、思いつくまに筆をとりましたが、先にも述べました通り、

卒業生からの便り
一生燃焼・一生感動・一生知無
先日、ある研修会に参加した時、某研修センターのインストラクターの方が人生観として「一生燃焼・一生感動・一生知無」なる言葉を挙げておられました。

最初、研究室のテーマについて伺いましたが、有機硫黄化合物の合成と反応が中心で、この研究を始めた動機は、昭和三十年頃に日本で最初の水素化脱流精製プラントが建設される前に、その事前研究として、脱流反応の基礎研究を行ったからと云う事です。

研究室訪問
有機合成化学研究室
板橋 國夫 教授
今回の研究室訪問は、有機合成化学研究室へ入り、庄野信司教授の下で研究を行い、現在に至つておられます。

工化創立五十周年記念特集

設立まで

土木、建築におけること十九年、日本大学工業化学科の新設が文部省から認可されたのは昭和十三年三月二十四日である。工学部、専門部工科及び高等工学校にそれぞれ工業化学科が誕生し、四月下旬より授業が開始された。

工業化学科が、この時期に設立された理由とか動機については、その頃の関係者が殆ど亡くなられている現在、詳しくはわからない。しかし、当時の国際情勢のなかで日本の産業界が高度の工業技術教育に強い期待を寄せていた時代であったのだから当然のなりゆきであったとは推測できよう。

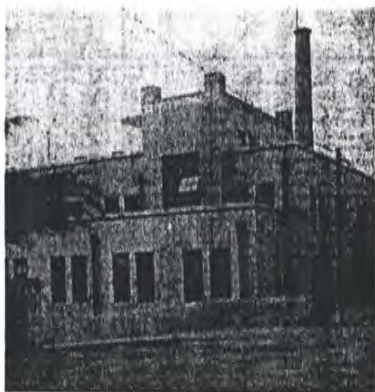
ひるがえって、当時の高等教育界において本学の占める地歩を考えてみると、総合私立大学として早稲田、慶応に迫ろうとする態勢を整えつつあった頃とみなされ、他の私大に先駆けて工系系教育に力を注いでいたことを一つの特色となしつづけた。

本学同様、私立大学で同じく理工系学部を有していた早稲田大学には既に応用化学科があり、続いて慶応にも同じく工系系学部が出現しようとするこの時代は、日本大学としてもこれらの同僚大学におくれを取らないために、何としても工学部の拡充整備を図っていく必要があったことと思われる。

こうした学内外の事情を背景に、昭和十一年ないし十二年頃、時の工学部学監で事実上の学部経営者である円谷弘氏の相談にあずかったメンバーの一人に、設立当初より学部電気工学科で指導的立場で教鞭を取られていた東京帝大教授(本学兼任教授)の大山松次郎博士がおられた。

ともあれ化学系新設の方針は大山教授を通じて、東京帝國大

工業化学科 創立の頃



初期工業化学科の特色と 教授陣容

ときの共通のイメージとなった。二号館は計画設計の段階では、地下一階、地上四階建の明るい感じのビルとして建築完成の予定であり、資材の確保もできていたのだが、支那事変の進展にともなう非常事態下、軍、官方面よりの命令によって、工事着工後計画縮小を余儀なくされ、地下一階、地上二階、将来増築を含みとして、屋上に突出した鉄筋セメント張りで覆い、煙突だけが異様に高い形で落成を見るにいった。

青年教授は持ち前のフットで勢力的に活動を開始し、多くの困難を排して翌年四月にはたちまち新学科を充足、思つくひまもなく、次の年には工業化学科の二号館建築をなし遂げてしまっている。

永井教授を中心とした工業化学科諸先生の並々ならぬ努力と大学幹部の後援により、昭和十三年九月、月野河台一丁目五番地の高台の一画に基礎工事を開始した工学部第四研究所(二号館の当時の正式名称)は、昭和十四年十二月二十六日漸く完成に漕ぎつけ、翌昭和十五年一月十二日に落成式が挙行された。

これが現在の理工学部月野河台キャンパス二号館であり、その後ずつと工業化学科の教育研究の中心となっており、すべての工業化学科OBにとって母校を想い起こす

事象も含めて、工業的な化学研究を行うこと、すなわち、化学技術の研究・教育を目的とした領域を指すと思われるが、これを具体的に表示するものとして、昭和十六年度、工学部工業化学科授業時間割を見ると、教育目標と内容の相応性は、はっきりと首肯できるものである。

毎週一学年から三年生までに、基礎化学系科目十時間、応用化学系科目十二時間、化学工学系科目十八時間、応用系科目十二時間、実験五十時間という配分であり、この他は語学、教養、法規等の学科であった。この頃すでに工業化学科の内容に変化しつつあった東京帝大応用化学科の同年度講義要目によって、同様配分を試みると、基礎系十、応用系二十四、化工系五(準化工と思われるもの四)実験四十程度と換算し得るので、従来の学科配分の常識からするならば、飛躍的先駆性を示すものであった。

しかも、このカリキュラムによって行われる時間割を見て驚くことは、多士済々の教授陣容とともに、その若さでもあって、この点にも当時の工業化学科の意欲的な面が現れている。専任教授陣の、永井一郎(前出)、西川英三(大正八年・東大卒)、中原万次郎(大正十二年・東大卒)、工藤憲(大正十三年・東大卒)、黒柳安二(大正十一年・東大卒)、仲尾司(大正十五年・東大卒)、横手正夫(昭和十年・東大卒)の各先生を列記しても、その平均年齢は四十歳前後である。加うるに他の諸講師の顔ぶれがまた若く粒よりのであることも目を張らせるものがあった。これ等諸先生方の若き日の熱意と創意ある講義と御指導は、将来に限りない夢と希望を胸にして学科の門をくぐった学生に強い印象を与えずにはおかないものであった。

良き師にめぐまれ、ニュー・フロンティアを目指して集まった若人の学生生活には、燃える情熱とみずみずしい活気がみなぎっていた。『記念誌「五十歩の歩み」(1988)』より抜粋

工化会の五十年

工業化学科に工化会が生まれたのは、工業化学科が設立された昭和十三年の秋のことである。当初は卒業生は未だいなかったため、学生だけの会であり、高等工学校、専門部及び学部(旧制)の各学生が協力しあって、「日大工化会報」を刊行し、昭和十八年六月までに十一冊を出した。しかし、第二次大戦が始まる前、用紙が入手困難となり、刊行を中止しなくてはならなくなった。

工化会の復興は戦後十年余りの後の昭和三十三年十月に実現された。再建後の工化会は、再建前と異なり、旧制(高工、専工、学部)、新制(学部一、二部、短大、二部)の卒業生と学生及び工業化学科教職員を会員とする組織に変わり、大学紛争の起る前の年までかなり活発な活動が行われた。主な活動内容としては、会員名簿と工化時報の発行があげられる。

特に、昭和三十四年版の会員名簿の発行に当たって、コピーの機械もコンピュータも何もなかった時代での編集作業は困難を極め、編集作業に率先して参加してくれ

た学生は夏休みは完全に返上せざるを得なかったが、当時の学生や教員の、まさに「人生は意気に感じろ」といった気がまがえが、この難事業をささえてくれたのではなからうか。その後、大学紛争もあり暫く工化会名簿の発行は中断されたが、工科校友会からの助成金が工化会に交付され、昭和五十二年、昭和六十一年に刊行された。工化会再建後に出された「工化時報」は、戦前の「日大工化会報」がアカデミックであったのに比べて内容がすっかり異なり、卒業生の便りが中心であった。これも学業の便りを中心とした。昭和五十八年まで全くと刊行されていぬ。工化時報復刊第一号が刊行されたのが昭和五十九年三月である。以降昨年までに第四号まで

心に残った出来事

工科校友会会長 太田善造

私が予科から工業化学科に入学したのは昭和十七年戦時の学年短縮により十月のことである。まもなく学徒動員となり文化系の友人たちは軍隊へ召集され、理工・医・教育系の学生が徴兵猶予を受けていた時代である。

繰上げ卒業の先輩を夜、日比谷公会堂で「若きエンジニア」を歌い東京駅まで送ったこと、空襲が激しくなるにつれ、自宅や下宿を焼け出された友人たちと私の寄宿先で同居し、空き腹を抱え、侃々々々の議論を交わしたこと、食糧調達に苦労したことなど苦しくもまた懐かしい思い出は多い。

入学して間もなく、三回生の笹生仁先(現生産工学部教授)が教室へ来られ、「工化時報」を配布され「歴史の浅い工化の発展と



刊行された。配布は、学生(大学院、学部、短大)約一千名を主としており、卒業生には各研究室ごとに行われる同窓会などの機会に便乗している状態である。工化時報を各人に送り届けることができないのは、工化会の基金不足にほかならない。せめて二十万円の位の基金をもつことができればよいのだが、この夢をかなえてほしいものである。

化学を学び、そして駿河台や習志野からの巣立った諸兄弟姉妹には機会あるごとに学生時代を懐かしなつかしみ、またこれから巣立つ後輩に激励の声をかけて下さることが望ましく、このことが今後の工化会の存在の意義を高め発展につながることを信じている。

前出「五十歩の歩み」より抜粋

団結のために他学部には無い工化誌を発行していることを説明のうへ、「工化校友の結束と伝統の確立」を訴えられた。その熱意と真摯な姿に私は胸を打たれ、そのときの感激は今でも心に焼きついてる。当時の工化時報はガリ版刷りで紙質も悪く簡単なものであったが、工化の発展を願う気概が紙面に溢れ、立派な内容であった。

「工化時報」は戦前戦後の紙不足の時を除き現在も続刊され、教授・OB・在学生の固い絆となっていることは誠に意義深く、関係各位のご努力に深い敬意を払うものである。「工化」という活字や言葉は大変懐かし、また今でも重みのある響きを私の心に与えてくれる。

学究の面でも先輩、後輩の交流は盛んであった。あるとき三回生の城本、山根両先輩から、化学技術に関する研究会の結成及び参加

研究会(城山会と称した)のメ

私はこの爆弾が「原子爆弾」と思われる事、戦争を止めた方がよい事を部長に上申した。部長は他言を禁じたが良く判ったとの答えだった。程なく終戦。

★ 四十七年が過ぎ、先生方の名前、授業内容は殆ど忘れられたが、これらの言葉だけが戦後の私の出所進退を誤らぬ正しい指針となったのである。

昭和十七年専門部卒 笹生 仁

★ 第二次大戦末期、私は北朝鮮で航空隊本部情報係であった。八月六日、「広島」新型爆弾落下、被害甚大、「爆弾一発ニテ広島ノ死者二〇数万人ノ見込み」二通の電報を見て直ぐに先生の原子核破壊の講義を想起した。原子核破壊は理論上10¹⁰の熱と強い放射線、熱線を出し、超強力な破壊力が予想されるというのだった。

★ 工化時報創刊時のものがあってたように思い文箱を探したがどうしたものか見当たらず、近藤、芝らの遺言が目につき、改めて読み返してみた。学術及び一般教養の蔵書を生き残った仲間らに託するという趣旨のものであり、相互に交換して放ったのである。激しい戦時下に学び、科学技術の要は自らから肝に銘じていたが、一面、社会科学の知識に渾身、書を漁り、師を訪ね、友と夜を明かし議論したものである。研究意欲の性格もあつた「工化会報」とは別に、技術学徒なりの人生観なり社会観を語る場として「工化時報」の創刊、編集に関わったのは、こうした当時の心情が背後にあったように思う。

これからの化学工業の進展は、バイオに端的に見られるように、人間自体との関わり合がこれまでになく重要な課題となり、いかに人間生活や自然に巧みに組み込まれるような技術の方向づけが課題となる。それだけに社会科学を含めた広い見識と判断力が問われるわけである。「工化時報活動」もそうした一つの旗標として一層の深化、進展を期待して已まない。

昭和十八年旧制学部卒 生産工学部教授

恩師の言葉

西宗雄

★ 戦時学業短縮で卒業と同時に軍に入隊が決定した。徴兵検査の日、先生から送別の辞を頂いた。「校門より奮門へ、そして戦争、何の為に工業化学を学んだのか、不安も有るだろうが、諸君が此処で学んだ、化学的探求方法だけは忘れないで欲しい、君達が無事生還して職に就いた時、必ず技術的離間にブツカルと思う、そんな時はこの方法で探れば問題は解決が出来ると思う。知識は本に頼れるが本で方法は学べない。自身で解決出来ない時は学校を訪ねてくれ、答えは出せなくとも、良いアドバイスは出来ると思う。諸君の武運長久を祈る。」という内容であった。

★ 第二次大戦末期、私は北朝鮮で航空隊本部情報係であった。八月六日、「広島」新型爆弾落下、被害甚大、「爆弾一発ニテ広島ノ死者二〇数万人ノ見込み」二通の電報を見て直ぐに先生の原子核破壊の講義を想起した。原子核破壊は理論上10¹⁰の熱と強い放射線、熱線を出し、超強力な破壊力が予想されるというのだった。

★ 工化時報創刊時のものがあってたように思い文箱を探したがどうしたものか見当たらず、近藤、芝らの遺言が目につき、改めて読み返してみた。学術及び一般教養の蔵書を生き残った仲間らに託するという趣旨のものであり、相互に交換して放ったのである。激しい戦時下に学び、科学技術の要は自らから肝に銘じていたが、一面、社会科学の知識に渾身、書を漁り、師を訪ね、友と夜を明かし議論したものである。研究意欲の性格もあつた「工化会報」とは別に、技術学徒なりの人生観なり社会観を語る場として「工化時報」の創刊、編集に関わったのは、こうした当時の心情が背後にあったように思う。

一新会のこと
(株)小坂商会 田村博
昭和二十七年、わがクラスは、新学制による、第一回卒業生として、戦後の混乱の残っていた、社会に学際より立ち上りた。同意の仲間、旧制予科より転入組を主に、戦時体制よりの復学等

三十年を記念して、ささやかであるが、一新会賞を設立、我々が若きエンジニアを高唱した、未完成の備を、後輩諸君に託すと共に工業化学科の発展を期待する次第である。
昭和二十七年卒
齋藤の回顧
相模ゴム工業(株) 武内隆幸
学生時代の齋藤時代の印象に旅行がある。昭和二十年代の後半、北は福島県郡山の現在の工学部へ無機化学の五来教授をお訪ねし、

学生時代に心に残った出来事
三和サービス(株) 中澤雄一
心に残っていることは三点ある。第一は入学式に於ける、横地伊三郎工学部長の訓辞で「第二次大戦は終結した。憂えることは科学者が、敬虔なる宗教心を失いつつあると思われ、科学者が、神を畏れる心をなくしたとき、人類の滅亡につながる。宗教心の堅持を望む」と、第二は東大教授兼日大教授の無機工業化学の泰斗、永井彰一郎博士の講義「東大の学生に比して諸君の学力には若干の差がある。この格差を縮めるためには格段の努力が必要である。よって私の講義では毎週の講義についてレポートの提出を求める。これは可能な者だけ当講義に出席されたい」というものであった。第三は、三羽忠広先生による「酸化エチレンと繊維素誘導体」の卒業研究である。酸化エチレンを自分の出身工場の日曹二木木の好意で指導教員は池村礼謙、実験の同僚は現理工学部教授の、若き日の山田翠嬢であった。夜の実験である。殆ど毎晩の徹夜作業の如き苦難の日々、若さがさせた青春の一駒は忘れられない。
昭和二十八年二部卒
四半世紀を振り返って
小野田セメント(株) 石井四郎
公費問題、オイルショックなど絶えず繰り返される社会変動の影響
昭和二十七年卒

学生座談会
五十周年に寄せて
出席者
石川 恵子・宮田 房江(2年生)
見玉 裕子・高橋 圭二(3年生)
石井 洋之・今野 由子(4年生)
塩沢 佳幸(大学院前期2年)
市村 孝(大学院後期3年)
滝口 孝志(工業化学科助手)
滝戸 俊夫(理工学研究助手)
(司会・編集) 桜川 昭雄(工業化学科助手)

偏差値の輪切り
司会 本学科への志望動機とか入学して感じたことなどは、石川 恵子 本学科に進学する意志はありませんでした。合格した大学の中から総合大学である本学を選びました。授業に対する姿勢もたいなものですが、のんびりしている人が多いですね。
高橋 高校の授業で化学以外には興味を持ってなかったもので、本学科を志望しました。入学してみると実験などで拘束される時間が長いので、驚きました。
見玉 付属高校の出身なので、本学のいずれかの学部に進学しようと考えていました。成績の関係で本学科になりました。
宮田 特に日大ということでは有りませんでした。初めはあまりヤル気をおこりませんでした。今では本学科に進学して良かったと思うようになりました。
司会 大学院まで進んだ人達は、塩沢 付属の出身なので、高校の成績で志望学を決めました。私

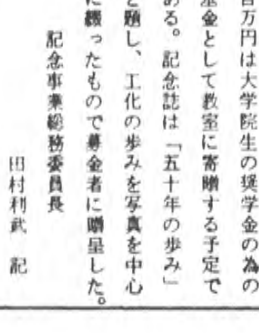
も白いものが目立ち始めたこの頃である。在学中、もっとも印象強く残っているのは、やはり大学紛争の真只中で学んだことである。校舎が中央大学や明治大学に隣接していた関係もあって紛争も激しく、大学が封鎖されることもしばしばで授業を受けることもままならず不安な毎日を送っていた。
やがて、紛争も収拾し授業も再開されて無事卒業することができた。私は俗にいう勤労学生で、昼は職場に勤務し、夜は駿河台の校舎に通学していた。仕事をしながら学ぶという事は本人の自覚や向上心、体力といったものももちろん重要であるが、さらに、私にとって心強い支えとなったのは同じ様な境遇の中にも学んだ級友に巡り会えたことだと思ふ。彼らとは時には酒を酌み交わし、将来を語り合い励みあっていたのである。
また、私は素晴らしい先生方にもお会いすることができた。卒業研究室の和井内先生を初めとする日大の先生方はもちろん、他の大学の先生方、研究者の方々とも知遇を得ることができた。今日の私がいるのはこのような多くの方々のご指導ご協力によるものと思つていきたいと思います。私の就職先も化学系へ就職する人が少ないです。今野 企業の規模とか給料、勤務地などで就職先を決める傾向があると思つています。私の就職先も化学とは直結していませんが、女性なので勤務地を優先して決めざるを得ませんでした。
児玉 ある先生から化学は応用範囲が広いというか、まあ、漬しがきくというか、それが化学の良いところだと聞きました。
希望ある将来を築くためには司会 このあたりで本学科の将来につながる意見をお願いします。石川 先輩にお話したいんですけど、どうせ日大だからというの、止めてほしいですね。後輩にする夢も希望も無くなります。市村 先生はノーベル賞でも取るつもりで研究して、学生はノーベル賞でも取れる研究者になるつもりで勉強すれば、どうせ日大からは無くなりますよ。塩沢 卒業発表会を時期を考慮直してほしいですね。1、2年生は春休中にわざわざ出て来る気にはなりませんし、3年生は既に入室する研究室が内定していますので、研究室を選ぶ参考に出来ません。

化学に知的好奇心を
持とう
工業化学科主任教授 和井内 徹
工業化学科が創立されたのは昭和十三年で、今年が丁度五十周年になる。その間卒業生は一万六千名を超え、日本の化学工業の発展に大きな寄与をした。日本の化学工業は欧米の模倣からはじまった。化学工業の進展は、しばしばガス灯の点灯時期が目安にされる。ガス灯がはじめて点灯したのは一八〇七年ロンドンで、パリは一八一五年、ニューヨークは一八二五年、横浜は一八七二年からロンドンから六十五年、すなわち日本の化学工業がそれだけ遅れていたわけである。その日本が今ではGNP

を受け、各学部の入試競争率もその時代を反映した業種の好、不況により大きく左右されていると想ふ。しかし、本学科卒業以来、既に四半世紀、世間の荒波にもまればながら振り返って見る時、やはり工業化学科を選んで良かったと思ふことが多い。
卒業の頃、十年ひと昔と言ふ単位で働いていた世の中も、現在では一年単位で変動する時代にあつて、目新しい商品が次々に生み出されている。この良否を判断する能力は材料の本質を知ることにある。また、材料開発に従事している仕事柄、化学的知識のみならず土木、建築分野や生産ラインでの機械、電気分野までの業務への対応を余儀なくされるが、これら広範囲の業務へ従従できる技術者は化学系が一番順応性が高い。もちろん、技術者として専門分野の知識を持つ事は当然の事ではあるが、何か一つでも他人より秀でた物を持つ必要がある。
現在求められている技術者は創造性と行動力を持つ事にあるが、技術に溺れる事なく謙虚な気持ちで周囲の環境を加味した行動が取れるゼネラリストとしての素養も要求されている。
物の特性を理解せずして外見だけを追求しても砂上の楼閣である。その意味でも化学系技術者は物への解析力を持っていて非常に有利である。
物の解析力と解析技術の基礎を更に身につけ、激しく移り変わる時代への適応的な判断力を養う事が増々要求されて来ている昨今である。
昭和三十六年卒
学生時代の印象と今後の工業化学への期待
東京税関 佐藤宗衛
卒業して早くも十八年、頭髪に

お会いすることができた。卒業研究室の和井内先生を初めとする日大の先生方はもちろん、他の大学の先生方、研究者の方々とも知遇を得ることができた。今日の私がいるのはこのような多くの方々のご指導ご協力によるものと思つていきたいと思います。私の就職先も化学系へ就職する人が少ないです。今野 企業の規模とか給料、勤務地などで就職先を決める傾向があると思つています。私の就職先も化学とは直結していませんが、女性なので勤務地を優先して決めざるを得ませんでした。
児玉 ある先生から化学は応用範囲が広いというか、まあ、漬しがきくというか、それが化学の良いところだと聞きました。
希望ある将来を築くためには司会 このあたりで本学科の将来につながる意見をお願いします。石川 先輩にお話したいんですけど、どうせ日大だからというの、止めてほしいですね。後輩にする夢も希望も無くなります。市村 先生はノーベル賞でも取るつもりで研究して、学生はノーベル賞でも取れる研究者になるつもりで勉強すれば、どうせ日大からは無くなりますよ。塩沢 卒業発表会を時期を考慮直してほしいですね。1、2年生は春休中にわざわざ出て来る気にはなりませんし、3年生は既に入室する研究室が内定していますので、研究室を選ぶ参考に出来ません。

工化創立五十周年記念事業報告
今年が工業化学科創立五十周年に当たり、卒業生も一万六千名に達した。この機会に祝賀の事業を行なおうとの声があがり、工化会と教室内が共同で卒業生に呼びかけたところ、多数のご賛同を賜わり、左記のような成果を得て記念事業が無事終了した。
一、祝賀会 本年六月二十五日、京王プラザホテルで卒業生を中心して六百名の出席を得て実施し、盛會であった。
二、五十周年記念テレホンカード モダンアーティスト平塚良一氏(四十五年卒)のデザインによるシンボルマークを中心としたものを作成し、祝賀会出席者に贈ると同時に、在校生にも喜びを分かち、卒業生の意志をついでもらいたいと願い全員にプレゼントした。
三、記念募金 奨学金基金の設立と記念誌の発行を目的として卒業生にお願ひしたところ多数のご賛同を得、募金額は二千四百六十六万円に達した。このうち約一千八百万円は大学院生の奨学金の為に基金として教室に寄贈する予定である。記念誌は「五十歩の歩み」と題し、工化の歩みを写真を中心に綴ったもので募金者に贈呈した。
田村博 記



六十二年就職状況
当初は貿易摩擦の影響が懸念されていたが、就職活動の後半期に内閣拡大の政策効果が現れて、産業界の求人意欲が旺盛となった。こうした事情を反映して、工業化学科の学生にとっては近年にならぬ好況の裡に推移した。

一方学生の考え方は年々現代型となりつつあり、企業側の採用基準との間に大きな矛盾が生じている現状がある。企業側、学生側双方ともこの点をどの様に打開して行くかが将来の課題となつて来つつある。

工業化学科昭和62年度就職状況 (昭和63年3月現在)

産業分類	人数		主な企業名	
	大学院	学部		
製 造	化学・窯業・エネルギー・食品	17(1)	59(7)	三井東洋化学、花王、大日本インキ化学、住友ベークライト、日本酸素、新日鉄化学、東洋醸造、日本パーカライジング、東京応化工業、大日本印刷、凸版印刷、昭和シェル石油
	製 薬	2	8	中外製薬、高有製薬、富山化学、日本アップジョン
	電 機		12(3)	日立製作所、日本電気、サンケン電気
	一般機械		13(3)	本田技研工業、日本航空電子、北海道製缶、荒川車体工業、東京トヨタ自動車、オリエンタルモーター
	その他	1(1)	8(1)	日本バイリーン、パロマ、本州製紙、大王製紙、大東紡績
建 設	3	7(1)	日揮、朝日工業社、新潟工務、東亜道路	
小 売	1	2(1)	八百半デパート、大家家具、アルペン	
エンジニアリング		50(12)	インテック、CSK、日立SK、日本電気ソフトウェア、東芝エンジニアリング、富士通第一通信ソフトウェア、富士通コンピュータサービス	
保 険	1	2(1)	明治生命、日産火災海上保険、日興証券	
通 信		1(1)	N T T	
ガ ス 事 業		2	京葉瓦斯、武州ガス	
教 員	1	5	新潟県教員、愛知県教員、日大工化副手	
公務員(地方)		2	茨城県庁、川越市役所	
進 学		37(6)		
計	26(2)	208(36)		

() 内男女数、■は省略

アンケート

余暇の過ごし方はこれでヨカ?
余暇の過ごし方というテーマ(アルバイト、レジャー、スポーツ、および旅行)でアンケートを行った。工業化学科の二、三および四年生二五〇名を調査対象にし、回収率は七三・六%であった。(各表中、単位は全て、%)
一 アルバイトについて
アルバイトをする量(表一)を学別にみると、三年生が最も多

新年度の卒研着手内定(63.4)

研究室	指導教員		卒研内定者数
	男子	女子	
分析化学	内海・奥谷・磯崎・桜川	23	8
化学工学	小島・越智・柳木・栗原	24	5
無機工業化学	荒井・青木・安江	14	5
高分子合成	池村・武末・澤口	16	6
有機合成化学	板橋・中沢・上條	16	6
有機物理化学	和井内・真下・岡島	17	5
油 化 学	松本・秋久	13	5
有機工業化学	田村・深津	13	5
高分子工学	栗田・田川	11	3
固体触媒化学	山田	6	1
燃料化学	植竹	7	1
産業環境化学	市川	6	2
電気化学	上野	5	3
炭水化合物	宮森	5	1
金属化学	門井	8	6
計		208	136

いようにも思える。職種(表三)については、講義や実験による時間的制約が大きいので、融通のきく接客業が比較的多いが、男子の肉体労働、そして古くから人気のある各種教師も根強い。時給は表四の様である。アルバイトの回数は週四回程度が多かった。
二 スポーツ、レジャーについて
余暇を利用してスポーツやレジャーを楽しむ学生は九三%で種類も様々で男女差も見られる。人気上位のものを表五に示す。男子の場合、まとまった数字になっていないが麻雀やパチンコも水面下で見逃せない。いずれにしてもお金のかかることばかりであるが、おそらく五十年前の学生は現代と違って、ドライブはほとんどなくハイキングだったのではなからうか。映画や麻雀は今も学生時代を象徴する娯楽といえる。
三 旅行について
観光旅行が圧倒的に多いが、その費用はアルバイトで得られる金額一五万円以下であり、この場合当然ながら国内旅行が主になり、旅行日数も一〇日以内で留まる。一方、海外旅行も見逃せない数である。行き先も様々で、ヨーロッパ、カナダ、オーストラリア、グアム、ハワイなどが人気のようだ。海外旅行は昨今の世情から今後更に増加すると思われる。

表 1

性別	時期			平均
	年	月	日	
男子	2	36	51	25
	3	78	15	10
	4	38	28	38
女子	2	50	31	21
	3	73	27	6
	4	50	36	14
平均	4	12	12	75
平均	4	45	25	32

表 2

性別	目的					平均
	年	月	日	レジャー	社会勉強	
男子	2	59	17	10	9	0
	3	63	25	18	5	20
	4	34	10	14	3	7
女子	2	52	52	14	4	9
	3	73	13	7	7	7
	4	64	21	14	0	7
平均	4	13	0	13	0	0
平均	4	50	12	11	3	5

表 3

性別	職種					平均
	年	月	日	接客業	家庭・勤労者	
男子	2	40	15	13	36	0
	3	43	18	8	20	15
	4	31	10	0	31	0
女子	2	47	67	7	29	5
	3	36	21	36	0	0
	4	0	0	0	0	0
平均	4	27	29	14	0	0

表 4

性別	時給			平均
	年	月	日	
男子	2	3	3	2
	3	18	43	29
	4	10	52	3
女子	2	7	2	2
	3	14	23	29
	4	13	0	13
平均	4	11	14	36

表 5

性別	順位				
	1	2	3	4	5
男子	テニス	スキー	ドライブ		
女子	ドライブ	映画	スキー		
全体	ドライブ	スキー	映画	ボウリング	テニス

戦前のことだが、今の主婦の友会館が建つ前、空き地の一角に工業化学の定性、定量の分析実験室があった。時々私はそこは学友の仲先生を訪ねた。昭和十七年の三月から私も専門部工化工業化学科の一員となった。
二号館の扉を押して入ると、おそろしく今でも左側に守衛室があるのさう。右側には薬品と器具の配給室があった。二階中央の廊下を玄関上の方へ行くと右に中原先生の部屋があり、時々そこに東大の永井先生が来られた。左側に専門部主任の黒柳先生の部屋があり、しばらく私はそこに居候をした。やがて黒柳先生は別の部屋に移られ、代わって横手先生が入って来られたが、ある日、いが栗頭であられ「応召です。」といった。二階中央の廊下をばさんで教室が二つあった。午前八時すぎ教室の外に数人の学生がたたずんでいることがある。永井先生は一分でも遅れると教室へ入れてくれないと言ふ。



昭和十七年、十八年、戦況は徐々に悪化して行ったが、七月には学生を三組に分けて東北、北陸、関西の工場見学に行く余裕があった。しかし、軍事教練はますます厳しくなり、卒業の会議では配属科校が教練出席時間の不足を理由に成績優秀なる学生でも進級、卒業に頑強に反対した。御殿場には数日宿泊して軍事教練を強行する

昭和二十二年四月、専門部工化の郡山移転が決定した。在校生はこれに反対、別に郡山で学生を募集することになり、その後三年間、二つの専門部工化が併設されることになる。二十四年、専門部は新設大学に昇格、変身する。一方、駿河台の専門部も京成電鉄大久保駅近くに移転する。木造の兵舎跡である。これがやがて生産工学部に変身し、自身は北習志野に移転する。私はこの候補地を移転前年の秋に見に行ったことがある。小松のまばらに生えている荒地で、北風が土砂を巻き上げていた。まもなくそこに四階館の校舎が構想されることになる。専門部は短大となった。北習志野には新たな学科が誕生併設された。

趣味のコーナー
スケッチプラン 山田翠
上野の東照宮で牡丹をスケッチして今年はお正月に水墨で書いてみた。そして六月、明治神宮の花菖蒲と睡蓮が待っている。一年の計はスケッチプランから始まるが、大方の花は私を待たずに散ってゆく。花の命は短い。
新宿御苑に時折出かける。日曜九時の開園から一時間ほど。梅、辛夷(こぶし)、海棠(かいどう)、そして桜を今年に書いたもの。そのままだ一枚も仕上げていない。それでも息をはずませて花の前に立つ。山菜(さんしゆゆ)の黄色が眩しくて、金縷梅(まんざく)の花の姿が何とも愛らしく、樹齢七百年の大白蓮は一千の蕾が天を向いて開花を待つ花の鼓動が聞こえてくる。そんな時、私はもう画けなくなってしまう。仕方がないからまずい句で云いとめておく。
金縷梅や 躍り出でくる 花の精 山菜黄を 胸に灯して 本を読む

月出でて 大白蓮の ささめける 天の 夢のひとま 花吹雪 ほのめきて 天衣無縫や 白牡丹 「スケッチの旅」をしたことがない私はいま旅のついでにスケッチばかり。心に触れたものを白黒で一筆画くだけ。あとで見ると鮮やかな色彩を伴ってその景色がそっくり蘇ってくるから何とも不思議である。一人よがりのこの魅力に長年取りつかれたまま一向に上達していない。
人物は昔から不得手である。その私へのたつたの希いとあって小下園、大下園まで書いて夏休みも終わり、そのままベットの下の眠っていた一枚の画があった。思いついて取り出し眺めるうちに何故か、貴重な夏休みの一週間を棒に振って岩絵具で一気に書きあげた。柿若葉の下、花の手入れにひと休みしている父と母、実物大の六十号を展覧会で眺めていたら、ふとわかったことがある。十五年ぶりこの絵を画かせたのは、自分達

特に実験の制約を余り受けずにも、もしくは休みにアルバイトをしてはいる。アルバイトの利点は現金入手の即効力と社会勉強にあるようだ。一方、弊害は学生生活にアルバイトになっていく学生に生じやすい工業化学科で留年そして志半ばにして退学する学生の最大理由は深夜のアルバイトであるとも言われている。
結論は「アルバイトはあくまでもアルバイトであり何より優先するのは学業である」であろうか。学生の本来は勉強であることを忘れ、かつ人生の基本的な目的を見失い、決して安くない時間を浪費してはならない。これを機会に自らの生活をつめ直してみることにしよう。

編集後期
担当 児玉裕子 高橋圭二 元永浩司 田辺進吉
わが工化科が五十周年を迎えた。それぞれの立場で感慨深いものがあると思う。さて将来はというと、現在の学生にとって大学とは受験戦争を生き抜き、卒業後には企業戦士として社会で戦わなければならないのか。このような状況を作り上げた社会や父母に対する批判や「社会のリーダーとなる使命を科せられた一部の大学の学生以外は皆同じような事をしては」という感情的な意見、更には付属高校から派生する問題を指摘する声も耳にする。半世紀の歴史を踏まえ、次の五十年への新たな出発に際し、真剣に考えなければならぬ問題が山積されているように思う。

変身物語 五来 達

娘たちが次第に学生達に引き付けられ、村の男子青年達が面白からぬ感情を持始めた。さて、古代ローマの詩人オビッドゥスには有名な変身物語があり、現代ではドイツ作家カフカの傑作に「変身」という作品がある。終わりに専門部工化の遷れた二度の変身について略記する。
昭和二十二年四月、専門部工化の郡山移